

国際舞台で活躍する指導者たち【6】

川口希史子先生：4か国交流演奏会を主宰

監修：国際委員会



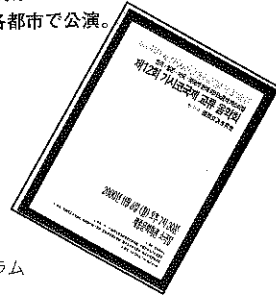
Report

川口希史子先生

Shiko Kawaguchi*

北京で生まれ、東京で育つ。アメリカのサンタモニカ・シティカレッジ音楽科専攻、シャーマン音楽学校、エウバンクス音楽院、ピアノ科修了。アンソニー・ヴィギアノ、ロバート・ウインズホル、ローズ・アリス・スミス他諸氏に師事。音楽教諭資格取得。国際音楽学校ピアノ講師を経て、オペラ、オーケストラ等のプロデューサー及び音楽ディレクターを経験。中国の中央楽団の音楽監督兼プロデューサーを務める。

11年前より音楽監督兼音楽プロデューサーとして「キシコ国際交流演奏会」開催し、韓国・中国・日本・米国それぞれの国の作曲家による現代曲を、各国演奏家によるピアノ競演で、北京、ソウル、東京、ロサンゼルス各都市で公演。



右) 今回のソウル公演プログラム

大絶賛のソウル公演

昨年11月ソウルで開催した第12回キシコ国際交流演奏会。この演奏会は、中国・韓国・日本・アメリカ4ヶ国の現代作品を出品し、各国の国民性を反映させた作品とその演奏を鑑賞し、それを通じて国際交流を図るのが主旨である。

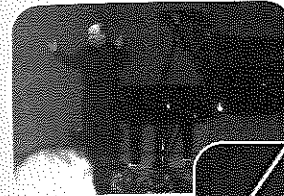
今回日本からは、武満徹の「雨の樹」、赤石敏夫の「THE BLUE MOON」、西村朗の「オパール光りのソナタ」の3曲を紹介、ピアニストの里見暁美が3作品を演奏した。大変きれいな音色の響きで、日本人作品の素晴らしさを伝えてくれた。中国は中国特有の音階を取り入れた流れのある民謡のような曲や、いかにも現代作品らしい曲を、ピアニストのヤン・ミンが繊細なテクニックで素晴らしい演奏を聞かせてくれた。一方韓国は、同国民謡のアリランをベースにした「アリラン」の小品を、ハエ・ジェン・リーが演奏。人気のピアニストのようで、彼女が舞台上に登場した時には会場から一瞬どよめきが湧いた。最後に米国の巨匠ジョン・ペリー（南カリフォルニア大学教授）がラッセル・クーバーの現代作品を完璧な技術をもって演奏し、聴衆の心をとらえて拍手が鳴りやまなかった。こうしてソウル公演は、数百人の聴衆の温かい拍手と現代作品に対する興味と理解を促して幕を閉じた。

初めて当地で公演した8年前は、まだ韓国と中国の国交が回復した直後だったため情勢もやや不安定で、聴衆もこれからやっとな現代曲を理解し始めるという段階であった。それが今回は、韓国と日本がより親密になりたいという機運が高まったのか、会場の雰囲気も暖かいものを感じた。この聴衆の変化は、この11年間のキシコ国際交流演奏会の歴史と重なる。手作りの演奏会をモットーとして、多くの支援者の協力と愛情を支えに、一人で総監督、プロデューサー、マネージャーと何役もこなし、発展に結び付けることができた。

交流演奏会のきっかけ

思えばこの演奏会は11年前、地元埼玉県越生市教育委員会の協力の下、ささやかな聴衆を前に日中の交流演奏会という形でスタートした。まだこの時中国と韓国間では国交が樹立しておらず、この2国が同じステージ上に乗ることは禁止されていた。けれど私は何とかそれを実現させたいと願い、1991年7月日・中・韓3か国交流演奏会をサントリーホールで企画した。中国はこれに猛反対したが、韓国は乗り気で何とか開催に至ることができた。しかしこの時、中国大使館員が自らスピーチを舞台下から行うなど、韓国との溝はまだ埋まっていなかった。

韓国、中国、日本、米国の4ヶ国が参加する「第12回キシコ国際交流演奏会」が、音楽春秋社の主催によって開かれた。各国を一年毎に廻り、現代曲の紹介・演奏を通じて国境の垣根を超えた文化交流を図るこの演奏会、その主宰である川口希史子先生にお話を伺った。



右) 里見暁美は、日本現代曲の魅力を余すことなく伝える。



左) アメリカの巨匠・ジョン・ペリーの演奏に聴衆は魅了された。



中国での公演終了後、川口先生は前列左より5人目。4ヶ国共演のまさかの舞台が実現した。

しかしその半年後の10月、ついに中国・韓国が国交回復。翌1993年3月には初めてのソウル公演で、中国の人気ピアニスト、ヤン・ミンが初めて訪韓し、韓国音楽家と一緒にステージで演奏したのである。これは双方にとって意味深いもので、マスコミでも大々的に報じられた。こうしてアジアが友好的にまとまり始めた5年ほど前から、アメリカがこの演奏会に参加するようになった。これは知人であった米・ジャパントイムズのレスリー・ロード氏の協力を得たことで実現したものである。まず氏に依頼してロサンゼルス・フィルハーモニー広報誌に記事を掲載頂き、それが巨匠ジョン・ペリーの目にとまったことから、ペリー教授の演奏参加につながり、それが今日まで続いているのである。

アメリカの例に限らず、他にも知り合いの中国・韓国大使館広報官などにピアニスト探しなどで大変お世話になった経緯がある。こうした人の輪が、私にとって一番の財産となっている。

人々との出会いと輪の広がり

「どうしてこの演奏会を開くようになったのですか？」と聞かれることがある。

私は北京で生まれ、後に音楽の勉強の為アメリカに渡った経歴を持つ。その頃東洋人に対する白人の人種差別が非常に激しく、韓国や中国の人達と助け合った体験から、まず日・中・韓3ヶ国がまとまって、西欧と一緒に並んで演奏できたらよいと思うようになった。単一の国ではなく、アジアとしてまとまることに意義を感じたのである。その時ちょうど海外に在住していた私の音楽仲間が、帰国後に出演するところがないかと問い合わせてきたこ



米・タネバスタのレスリー・ロード氏。

とがきっかけとなり、ほどなくこの活動が開始することになったのだ。

これも偶然なのだが、ちょうどこの演奏会をスタートさせた頃、中国の中央交響楽団総監督（音楽プロデューサー）を依頼されたことがあった。公演1ヶ月前という急な依頼の上、中国語Faxでのやり取りで不安を残しながらも、「あなたの命を私に預けて下さい。」と日本人指揮者を説得し、中国へ。夢中で取り組んだ結果、公演は無事成功した。そしてこの経験により、その後のキシコ国際交流演奏会活動にあたって大きな信頼と自信を得る事となった。

実はこの時北京放送にインタビューを受けたのだが、驚いたことに「ご帰国の感想は？」と質問されたのである。北京生まれの私に対し、親しみを込めて投げかけてくれたこの質問に、故郷に恩返しのできたと感慨深い気持ちになったことを覚えている。

「音楽に国境はない」を座右の銘に。

最近のアジア諸国の発展は目覚ましい。西洋の楽器を使い現代曲を演奏するだけでなく、作曲するにも至っている。ほんの5~10年前を振り返れば、まだ中国には文化大革命の余波を受けて人民服を着ていた人もいれば、自動車も少なかったのが、大変な進歩である。

その歴史の移り変わりを目の当たりにしつつ演奏会を行ってきたが、国際交流としての役割も、回を重ねる毎にますます意味深いものを感じざるを得ない。韓国、中国、日本、米国と一緒に舞台をつくれれば、多くの聴衆の賛同を呼び起こせるとの信念は間違っていなかったと確信している。

とはいえ現代音楽の世界は未だに国境の垣根に捕らわれ、文化の交流は充分ではない。今後とも「音楽に国境はない」を座右の銘として、さらに世界中の国々との交流が進めば、音楽文化も発展し、21世紀にはその興隆の中にこそ、次の文化の芽が生まれてくると信じている。